

# 新入学生合宿

## A Report of Basic Seminar Camp for New Students

藤田 委子  
Tomoko Fujita

### 目 次

- I. はじめに
- II. 新入生の学校行事参加の意義
- III. ゼミナール合宿
- IV. おわりに

#### I. はじめに

各大学・専修学校において、オリエンテーションは、学生生活の適応とともに、教員・学生同士の交流などを目的に実施されている。入学生オリエンテーションなどを通じ早期に大学生活への導入を試みている。合宿・宿泊形式や外出によるものなど、形式については各校の工夫がみられる。新入生へのオリエンテーションと同時に2学年生へのリーダーシップの育成にも取り組んでいることが報告されている<sup>1)</sup>。

名古屋経営短期大学健康福祉学科におけるオリエンテーションは、履修登録指導などを含め、短大生活の見通しの指導をおこなった。入学式後には、ウエルカムパーティーと称し、立食での教員紹介・レクリエーションを実施した。学生同士の顔合わせにもなり、友人や仲の良いグループを形成した機会となった。保護者の参加もあり保護者間の交流も図られた。夏期休暇中には、同じゼミナール内での交流を図るために、1年次の基礎ゼミナールで合宿を行った。この報告では、愛媛・高知合宿（ゼミナール合宿）3泊4日の内容と実践を報告する。

#### II. 新入生の学校行事参加の意義

本学科へ入学する学生の多くは、青年期の段階であり、身体的な成熟はしているものの、心理・社会的には依存から独立していくという段階である。アイデンティティの形成の段階といわれるこの時期に大学生活を過ごすことは、心理・社会的なモラトリウムを謳歌しているようにみられる。しかし、入学時より専門職への意識を構築されていく介護福祉士養成では、社会への役割に適応することが、早期あるいは入学前から求められているとも

いえる。さらに、青年期の人間関係の発達においては、人間関係が広がっていく時期である。類似性の対人関係から、相補性の原理に従う人間関係、そして相互性の原理に従うようになっていく<sup>2)</sup>。この点においても、多種多様な援助対象者をかかわることを求められていく学生にとっては、早い時期から相互性への段階へと期待されている。学生自身あるいは専門職としてのアイデンティティを確立することをはじめ、青年期の発達課題に適応できるように支えることが、養成校としての短期大学に求められているといえよう。

新カリキュラム導入以後、介護福祉士養成における授業は合併授業<sup>3)</sup>などが行われなくなり、開講される授業の受講生は同じ介護福祉士を目指す学生だけとなる授業が多くなった。養成校の新入生は、新しい環境に適応することともに、養成2年間を同じくする同士との交流が必要となってくる。介護福祉士養成における仲間づくりは、資格取得時の介護福祉士養成の目標の1つの「円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける」ことにつながるともいえ、学生同士の交流を促進することは意義がある。

### Ⅲ. ゼミナール合宿

ゼミナール合宿の目的は以下の三点である。第一に、合宿を通じて仲間づくりの機会を提供し、学生生活の適応を促す。第二に、仲間づくりから他者理解・自己理解を深め、介護福祉士として必要なコミュニケーション能力を身につける。第三に、中山間地域へとおもむき、その地域の福祉活動を理解する。(1. 中山間地域の現状を理解する。2. 少子・高齢社会が進む中山間地域の福祉サービスを検討する。3. 参観地域およびリアス式沿岸地域社会の現状を理解し、福祉サービスのあり様を検討する。)

2012年8月27日(月)から30日(木)の3泊4日の日程で、愛媛県宇和島市・高知県四万十市ほかへおもむき、食事・レクリエーションの時間を共有しつつ、中山間地域の現状を見学した。参加者はゼミナールの学生11名で、男性4名、女性7名、年齢は18歳から20歳である。ゼミナール合宿への参加募集は、ゼミナールの初回(4月)に行い、参加を促した。7月には合宿のしおりを配布し、合宿の参加意欲の向上を図った。ゼミナールに在籍するほとんどの学生が参加した。

1日目は本学を集合場所とし、3台の車に分かれて愛媛県宇和島市を目指した。初日は移動時間に占められ、車中での交流が中心であった。学外のアルバイトの話や音楽・TVなどの趣味の話を通じて、類似点を見出しながら、相違するところを認め合う場面もあった。途中休憩するサービスエリアでは、瀬戸内海を展望し、島々の交通の不便さやそれに伴う物資・人的流通の困難さを感じることができた。食事は各地域の郷土料理を選択し、素材や調理方法から地域の理解となった。

2日目は、大岐の浜(高知県土佐清水市)での海水浴を予定していたが、台風の接近もあり、明浜海岸(愛媛県西予市)へ変更した。移動で、リアス式海岸の入り江に港が整備

され、集落が築かれているところを多く見た。さらに、山側は急な斜面であったが、収穫物を運ぶためのレールが轆かれているところを見ると果樹が栽培されていると予想できた。居住できる地域としては狭い範囲であるが、環境にあわせた産業が展開されていると思われた。明浜海岸では、海水浴を通じて学生同士の交流が図られていた。普段交流の少ない仲間との交流ができ、学生同士に「意外性」を発見できたようであった。午後からは宿泊先の四万十市へ移動する。天候不順のため濁流の四万十川を眺めることとなった。食事はバーベキューで、火おこし・食材の下ごしらえなど学生がおこなった。率先して役割を見つけ行動する学生や概観し手助けが必要ないか聞いて行動する学生など、小集団における学生の行動が見ることができ、引率する教員として学生の理解につながった。

3日目は、前夜と同様、火おこし・食事作りから始まった。宿泊先の清掃を済ませ、前日訪れる予定となっていた大岐の浜を目指すこととした。途中、四万十川に架かる岩間沈下橋<sup>1)</sup>を見学する。増水で川の水位が上がり、文字通り橋が沈下していた。橋があることは、水流の変化で確認できた。当然、対岸への行き来はできない。現在は近代的な橋が設置されているところもあり、孤立することはないと思われるが、沈下橋のみであった頃は、生活路として頻繁に使われていたと思われる。この日のように増水などで交通が遮断される中山間地域の不便さを直に感じられた。学生からは、不便さや橋の狭さから欄干の無いことの危険性などの意見が出た。到着した大岐の浜は、閉鎖となっていた。遠浅で砂浜・海が美しいと評価の高い海岸であったが、観光客のモラルの無い行動によって地域住民からの希望で、今年海岸が閉鎖されたと調べてわかった。事前調査をしていなかったことで学生を落胆させてしまったが、モラルの低さが自然環境を変えるという例を見ることとなり、観光招致にはよい面だけでないことがわかった。近くに作られた竜ヶ浜キャンプ場にて足摺の自然を体感した。宇和島市に戻り宿泊した。

4日目は、宿泊先の清掃をし、帰路についた。初日同様、移動に占められた。車中の学生からは、天候不順の不満の声もあったが、自然環境の良さと仲間との交流に満足できた発言があった。



増水時の岩間沈下橋



閉鎖された大岐の浜

#### IV. おわりに

このゼミナール合宿で、寝食を共にしたことで学生同士の交流を促進することができたと考えられる。普段交流の少ない学生間で「共通点」「相違点」などを見出すことができ、狭いながらも人間関係を広げられたと思われる。また、食事の準備や清掃など、役割を果たしていくなかで、学生間の「ルール」が生まれていた。学生間のコミュニケーションから、親密さが増し、互いに受け入れられたと感じられたと思われる表現があり、協力・サポートの様子からもグループの凝集性も高まったと感じられた。

合宿先の福祉活動まで知見を広めることまでできなかったが、地域独自の環境を学ぶことができた。この後は、近接県の山間地域との比較することを予定している。他の地域を訪問することで環境や文化に触れることで、学生の福祉研究の一端となればと期待する。

このような少人数での合宿は仲間づくりに効果があるとわかった。次年度の新入生の大学生活の導入にむけて、日程・予算などの制限があるが検討していきたい。また、合宿を経験した学生が、新入生を支援する「ピアサポート活動」なども有効であり、サポーターする学生の成長する機会となる<sup>5)</sup>。また、構造的エンカウンター・グループの導入が有効である<sup>6)</sup>ことは周知であり、学生生活の導入時期にかかわらず、プログラムを実施することも検討していきたい。

今回、学生にまた、筆者を含めた教員にとって、このような貴重な経験ができたのは、多くの方々のご理解とご協力のおかげであり、特に、宿泊先での三好利男様ご夫妻には、大変お世話になりました。この場を借りまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

#### 注

- 1) 竹田博信 (2012)「初年次教育と大学行事の参加によるリーダーシップ育成の試み」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第2巻、231-237 頁参照。
- 2) 岡堂哲雄ほか (1978)『患者ケアの心理』医学書院、96-129 頁参照。
- 3) ここでいう合併授業とは、介護福祉士養成課程以外の学科・学部と同時に行う授業をいう。養成課程の大半を占める領域「介護」の授業は、合併授業をおこなうことができない。
- 4) 普段は低水位においては橋として機能するが、増水時には水面下に沈んでしまう橋のことをいう。洪水で橋桁などに土砂が堆積し災害が起こることや橋が流されてきた経験から、欄干がなく橋が流されることを前提に作られているものもある。設置・修繕のコストが安いという利点があるが、橋からの転落や増水時には通行できないなどの欠点がある。
- 5) 中出佳操 (2003)「大学生によるピア・サポート活動とその意義」『人間福祉研究』(北翔大学)第6巻、85-99 頁参照。
- 6) 野島一彦 (2000)「日本におけるエンカウンター・グループの実践と研究の展開：1970-1999」『九州大学心理学研究』第1巻、11-19 頁参照。